

ヴァロトン 黒と白

三菱一号館美術館 22. 10. 29～23. 01. 29

「フェリックス・ヴァロトン」(1865～1925)は、スイス・ローザンヌ生まれで、16歳でパリに出て肖像画家としてキャリアをスタートし、初期に手がけた革新的な「**創作木版画**」は、早い時期に高い評価を得た。20世紀になるとさらなる探索を行い、単純で正確な線描、大胆なフレーミング、平坦な色面による構成、鮮やかな色彩、作品に葛藤や複雑な意図を込める点などが特徴である。

画伯の木版画作品は、表現方法も内容も独創的で面白くて、通常は多色刷を考えるとと思われるが、「**黒色の一色刷**」で斬新な黒白の世界「モノクローム」を1891年秋から世に送り出し、すぐに高く評価され10年ほど集中して作品を発表して、ヨーロッパの創作版画としての木版画を復活させたとされている。

本展では、当館が世界に誇るヴァロトン版画コレクションから、希少性の高い連作「**約180点**」の作品を一挙に初公開されている。

版画シリーズ《アンティミテより「嘘」と「お金」》 木版 1898年



アンティミテとは“親密さ”のことで、「お金」については画面の半分以上を、黒面が占めていることに全く驚かされる。かたまりのような黒と白で、大胆に描かれた秘めやかな男女の関係性を覗きみたような気持ちになる版画作品である。画風は「浮世絵」の影響を受けていて、人物描写がどこか「手塚治虫」に似ているとされている。



《楽器》



《万国博覧会》



《これが戦争だ!》